

古今著聞集の表現に関する一考察：今昔物語集・宇治拾遺物語との比較を通して

福田，益和
長崎大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/12126>

出版情報：語文研究. 39/40, pp.25-35, 1975-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

古今著聞集の表現に関する一考察

——今昔物語集・宇治拾遺物語との比較を通して——

福田 益和

古今著聞集の編著者橘成季は冒頭の序において、「夫著聞集者、宇縣垂相巧語之遺類、江家都督清談之餘波也」と記し、己が編著になる作物を宇縣垂相・江家都督の遺類、余波としてその亜流たることを認め、王朝時代に直接つながろうとした。にもかかわらず、巻第十六「興言利口」を代表とする諸篇の中にあらわれる同時代的口語りの説話は結果的に成季の意図をつき破り、本集の中世説話集としての性格を大きく特色づけているのである。

以上の認識に立って本集の表現を考察しようとする時見落すことのできないのは右にかかげた序の一文であろう。「宇縣垂相巧語」なるものが何をさすか問題であるが、宇治大納言隆国著と伝えられる散逸「宇治大納言物語」を一応これにあてることででき、一方「江家都督清談」は大江匡房「江談抄」をさしているものと考えられる。巻第四の文学篇には江談抄との出典關係を考へ得る数段がある由である。前者の宇治大納言物語なる

ものについては宇治拾遺物語の序に見える宇治大納言物語との関連もありその実体については問題をはらんで居り、今昔物語集・宇治拾遺物語との関係も明確ではない。しかし筆者が注意したいのは「宇縣垂相巧語」の中の「巧語」の二字である。「巧語」は序の文脈においては「清談」の対語としてあり、「巧談」と言うに等しいと思われる。諸橋氏の大漢和辞典に拠れば

「巧語」たぐみな言葉、巧に飾り立てていふ語。(白居易・鸚鵡詩) 人憐巧語、情雖重、鳥憶高飛、意不同。(下略)

「巧談」言葉たぐみに話すこと。上手な口まへ。(北史・江式伝) 俗学鄙習、復加虚造、巧談弁士、以意為疑。

といずれも事例が漢籍にみえ、語り口、表現のうまさの意味するものと考えられる。とすれば宇縣垂相の作物を「巧語」とみる立場は成季個人のものか、あるいは一般的認識であるのかはつきりはないが、その作物が語り口、表現のうまさをもったものであったことは確かであろう。そのうまさが具体的にどのようなものであったかたゞちに指摘することは困難であるが、成季には己が作物を編むにあたって宇縣垂相の「巧語」なるも

の意識せられていたのであるから「遺類」とはいえ、その表現面について「巧語」の要素が流れていることは間違いないと考えられる。故に本集の表現について考察するにあたっては、宇縣垂相の手になると考えられる宇治大納言物語について直接考察する必要があるがそれが逸した現在、これに深くかわる今昔物語集・宇治拾遺物語の本文について考察し、本集と比較することが残された方法である。本稿においては古今著聞集の表現の中、

件珠、醍醐僧正実賢あづかり給はりて、たび／＼宝珠法をこなはれけるとなん。(67)

是則、今日の和歌の題なりとぞ。(658)

のごとく「——となん。」・「——とぞ。」等と言いさす表現(結びの省略)、および、

此柿のひや／＼としてあたるを(439)

大いられてけい／＼となきてはしるを(338)

のごとき擬声・擬態語の表現について考察を試みる。前者は言いさす即ち語の省略をすることによって暗示の効果をあらわし後者は象徴語を附加することによって活写の効果をあらわし得る。両者の方向は省略・附加と相反しながら表現上の技法としてはいずれも有効と考えられるからである。

二

説話集の表現としての一典型をみようとする場合、今昔物語集・宇治拾遺物語をとりあげるのは一応異論のないところであろう。まして「宇縣垂相巧語」と親密な関係にある以上これを

もって比較の対象としなければならぬ。

今昔物語集の文章構造は春日先生の御指摘の通り、

今昔十「ケリ体本文」トナム語り伝ヘタルトヤ。

であり、「今昔」が文末形式「トナム語り伝ヘタルトヤ」に直接呼応しているものと考えられる。「今昔……トナム語り伝ヘタルトヤ」は春日先生の譬喩に従えば絵画の額縁であり、その額縁の一部としての文末形式「トナム語り伝ヘタルトヤ」の末尾の「トヤ」は結びの語の省略された表現(以下「省略表現」と呼称する。)と考えられる。今昔物語集においては「……トヤ」は文末形式の主流を為して居り、これに準ずる「……ト也」「(三)1、二〇13他48例)や、その他「……トカヤ」「(三)4、……カヤ」「(二〇)5」等が例外的にあるにすぎない。次にこの文末形式にみる「……トヤ」を主流とする省略表現を、説話内容たる「ケリ体本文」の中から求めると非常に少ないことがわかる。

邪見・放逸ヲ離リトヤ。(一五)31

人ノ造レルカト思テ取テ置タル也トゾ。(一〇)8)

医師ノ元カリケレバ事極テ口惜キ事也トナム。(二四)10)

等の事例をはじめとして計12例(トゾ3、トナム4、トヤ2トヨ2、トカヤ1)にすぎない。ケリ体本文は説話内容の中心を為すものであり、よって表現の特色もあらわれはらずであるから、そこに省略表現が稀少であるという事実は又今昔物語集の表現の特色ともなるであろう。今昔物語集においては「トゾ」・「トナム」等がそこで言いさしに終らず以下「ゾ」・「ナム」等の係助詞に呼応して結びの語があらわれ完結した表現形式(

〔 第 一 表 〕

巻	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	計
トゾ	1																														279	
トナム																																92
トカ																																1
トコソ																																36
トヤ																																8
トカヤ																																1
計	1	3	2	2	3	3	2	1	0	1	1	1	1	1	2	4	1	1	3	1	1	1	1	3	2	6	7	4	9	20	279	

以下「呼応表現」と呼称する)をとるのが一般である。即ち、例も必ズ此クナム礼拝シ給フトゾ答ヘケル。(二五〜42) 仏モ皆縁ニ依テ利益ヲ施シ給フ事トコソ聞ケル。(一六〜29) のことき事例。これを今昔物語集全体にわたって巻別に事例数を調査すると次の第一表のごとくなる。

- 第一表より次のことがわかる。
- (1) 全体的に巻の前半(一〜一七までをかく呼ぶ。)より後半(一九以後をかく呼ぶ。)に事例が集中している。(前半:107例 後半:310例)
 - (2) 語別には「トゾ」が主流を為す。(67%)
 - (3) 文末形式の一部としてあらわれる「トナム」はケリ体本文においては巻の後半に集中し(84/92)、よって文末形式の「トナム」と形式的に重複する事例が生じて来る。(後述)
 - (4) 「トヤ」は8例。文末形式の省略表現としてあらわれる「トヤ」に比して稀少である。
- 以上の傾向をもつて改めて文末形式の主流たる「トナム語り伝ヘタルトヤ」を眺める時、「トナム」・「トヤ」がケリ体本文において主流を示さないことから、この文末形式が編者独自の表現形式となっていることは明らかである。ただし、この文末形式は「語り伝ヘタルトヤ」の部分省略し、省略表現「トナム(語り伝ヘタルトヤ)。」となる要素をはらんでいるが、それを敢えて為さなかった点に今昔物語集全体の一貫した方針を見ることが出来る。次に文末形式「トナム語り伝ヘタルトヤ」の上接語はケリ体本文との接点を為す意味で重要であるが、この文末形式の主流たる「トナム語り伝ヘタルトヤ」のみについて上接語を検討すると、
- 助動詞744例、動詞23例、形容詞17例、助詞6例、体言5例、その他7例 (計802例)
- 助動詞が圧倒的多数を占め、その内訳をいえば、ケリ(ケル・ケレ) 427例、ナリ(ナル・ナレ) 190例、

ベシ(ベキ) 62例、ズ 30例、その他 35例となり、「ケリ体本文」の名にふさわしく「ケリ(ケル・ケレ)」が上接語の中心をなしている。この中でケル・ケレは上に係助詞が来てその結びとしてケル・ケレで言い切りとなり、これが更に文末形式につづく表現であり、いわば係結の呼応がかさなって行く形式で、

「係助詞……ケル(ケレ) + トナム語リ伝ヘタルトヤ」
となる表現である。中で、

「トナム……ケル + トナム語リ伝ヘタルトヤ」 (7例)

のごとき表現は形式的に二重の感をまぬがれない。

福徳無限シトナム説給ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。(二一→26)

故也トナム 世ニ為時ヲ讚メケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。(二二四→30)

文末形式は、ケリ体本文の主流を為す「トゾ」より考えれば「トゾ語リ伝ヘタルトヤ」とあつてもいゝはずであり、その事例も若干は存在するが(五→21・23・24・27、一一→30、一二→30等)、右のごとき形式上の重複をまぬがれたいとすれば、ケリ体本文において主流ではない「トナム」をもって文末形式に置き、ケリ体本文との接点としたことは重複を最少限に抑えた結果となつている。

以上のごとき今昔物語集の表現のありように比して宇治拾遺物語ではどうか。紙数の関係で詳細にわたつての記述、表等はさしひかえるが、その大要を言えば、

(1)省略表現 82例に対し、呼応表現 90例とはほぼ同数で、これは今昔物語集の 12(省略表現)対 417(呼応表現)とは対照的。

(2)省略・呼応いずれの表現の場合も「とぞ」が主流を為し、こ

れは今昔物語集の呼応表現が「とぞ」を主流としているのと同じ傾向である。

(3)省略表現の中「……とや」が一例もない。今昔物語集の文末形式の主流たる「……トヤ」と比べて対照的である。

(4)省略表現について上接語を検討すると、

(I) いずれも助動詞、中でも「けり(ける)」が主流を為す。(けり 28例、ける 37例)

(II) 上接語の助動詞「ける」の接続について、

「……係助詞→ける(結)」「とぞ」

のごとく「ける」が係助詞の結びとして一応終止し、これが

「とぞ」のごとき省略表現に接続する事例は減少し(11/37)

他(26例)は上に係助詞を伴わずに連体形「ける」が「……とぞ」・「……となん」等に直接する事例である。次のご

とき事例。

たれとはおぼえず、大納言迄なり給けるとぞ。(二→8)

犬はいよ／＼不便にせさせ給けるとなん。(一四→10)

これは今昔物語集の文末形式「トナム語リ伝ヘタルトヤ」においてその上接語「ケル」が係助詞を伴わずに(すなわち、係助詞の結びとして呼応し言い切りになることなく)連体形のみ、「……ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ」となる表現が稀少である(12例→一四→20、一九→17等)のと同照的である。

以上により、宇治拾遺物語では今昔物語集に比べて、「……とぞ」を主流とした表現という点において共通点を有しながら、省略表現がめだつて増加してくること、上接語において係助詞を伴わず連体形「ける」が省略表現「……とぞ」等に接続す

〔 第 二 表 〕

計	一〇	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	卷・篇目					
	魚鳥禽獸	草木食化	飲化異	恠異利口	興言利口	遊覽	哀傷	祝言	偷盜	博奕	圖画	相撲強力	馬矢	弓勇	好色	孝行恩愛	術道書	能管絃歌舞	和文歌	公文學事	政道忠臣	厭教	神祇		
58(6)	2	4	6	1	4	1	1(1)	4	3	1	1	2(1)	2		1(1)	2	1	8	4(3)	3	1	3	3		
5(1)			1	1(1)										1				2					けり		
4	1					1						1											けり		
2										1	1												たり		
1				1																			動		
2	1				1																		名		
1										1													小計		
73(7)	3	5	6	2	0	6(1)	0	3	0	1(1)	0	4	3	2	3	2	1	8	6(3)	3	0	1	3	4	
35(2)	1	1	2		5	1					1	4	1	2	1	1	1	1	2	2(2)	4	1	3	3	
6(2)			1	1(1)					1(1)				1		1						1			けり	
1												1			1								なり		
3										3													たる		
4										1							1					2	動		
49(4)	1	1	0	3	0	6(1)	0	1	0	0	0	1(1)	0	1	8	1	2	3	1	1	2	3	1	3	
36(6)	2	2	1(1)	1	3(1)	1	1				2	2	3	3	1	2	1(1)	1	1(1)	4	2(1)	1	2	けり	
1												1												と	
1															1								なる		
3										1							1			1			たる		
10	1	1				3		2				1					1	1					動		
4(1)					1	1									1(1)		1						名		
55(7)	3	2	2(1)	1	0	4(1)	1	4	1	0	2	0	0	2	4	3	3	2	0	3(2)	1(1)	1	2(1)	7	
1							1																	小計	
1										1														けり	
2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	と	
179(19)	7	8	8(1)	6	0	16(3)	1	8	1	2	5	16	6(1)	8	5	1	5	4	4	4	16	11	4	7	計

※ () 印の中の数字は追加抄入の説話。例えば
 11(6)~11例中、6例が追加抄入を示す。
 第三表も同じ。

「古今著聞集ではいかがであろうか。本集における省略表現は「……とぞ」、「……となむ」、「……とかや」、「……とこそ」。

三

る事例がめだつて増加している傾向を見ることが出来る。

179例となるが、これ等をそれぞれ上接語に従って巻・篇目毎に事例数をあげて表にしたものが第二表である。次に呼応表現は195例あるがこれを巻・篇目毎に事例数をかかげたのが第三表である。

〔 第 三 表 〕

計	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	卷										
	魚蟲禽獸	草木	飲食	變化	恠異	興言利口	闢諍	宿執	遊覽	哀傷	祝言	偷盜	博奕	藏鞠	画図	相撲強力	馬芸	弓矢	武勇	好色	孝行恩愛	術道	能書	管絃歌書	和歌	文学	公事	政道忠臣	釈教	神祇	篇目
138 (4)	7	5	4	1	1	11 (3)	8		5	1		6	4	4	1	1	6	4 (3)	3		4	20	12 (6)	8 (2)		2	4	10	6	とぞ	
9 (1)	1									1			2	1		1	1						1 (1)	1						となん	
20	2					6	1			1	1			2	1			1	1	1	1	1	1	1	1					とかや	
15 (3)				1		3 (1)	2				1 (1)							2				1	1 (1)	2		1	1			とこそ	
13 (3)	2					2 (1)	2												2				3 (1)	1 (1)	1					とや	
195 (21)	12	5	4	2	1	22 (5)	12	0	5	1	4 (1)	0	6	8	6	1	2	9	7 (3)	4	1	5	21	18 (9)	12 (3)	4	5	11	6	計	

第二表・第三表をもとにして以下考察を進めて行く。

省略・呼応表現の比は179対195とほぼ同じで、これは宇治拾遺物語と共通する。このことは本集および宇治拾遺物語が省略表現による暗示の効果を重んじ表現上の手法として一つの特色を示していることになる。本集においては、各説話の結語部分において、

俊快法眼は感歎入興しけるとぞ。(426)
陣につきたる諸卿たえかねて、みなわらひたりけるとなん。(104)

ふるくも蝦のた、かひはありけるとかや。(710)
とあらわれるだけでなく、結語以外の部分においても、

一條院以往に被書たるとこそ。(384)

延喜九年八月にもかゝること待けるとかや。(660)

是則、今日の和歌の題なりとぞ。(658)

とあらわれ、省略による暗示の効果を説話全体につよく意識していると考えられる。語別にみると省略表現において「……とぞ。」が優勢であり、以下「……とかや。」、「……となむ。」、「……とこそ。」の順となるが、宇治拾遺物語で6例にすぎなかった「……とかや。」が55/179と増加している点注意すべきであろう。「……とぞ。」の優勢は宇治拾遺物語でも同列であるから、右の「……とかや。」による省略表現は本集における一つの特色としてあげることができる。なお「……とや。」の省略表現は一例もなく、今昔物語集の文末形式の主流たる「……トヤ。」の表現は以後宇治拾遺物語・古今著聞集にわたって継承されていないようである。

次に卷・篇目毎に省略表現を眺めると、卷六(管絃歌舞)、卷一一(画図)、卷一六(興言利口)にそれぞれ16例みられ、や、偏りがみられる。編著者橋成季がその序・跋において、「琵琶者賢師之所伝也。(中略)画図者愚性之所好也。」(序)「子そのかみ、詩歌管絃のみち〳〵に時にとりてすぐれたるものがたりをあつめて絵にかきとゞめむがためにと……」(跋)と言及しているごとく管絃歌舞・画図は成季の得意のもの、興味の中心ともなるものであったが為_レにその表現において自ずから暗示に富む省略表現が頻用されたものと考えられる。興言利口篇は同時代の説話をもりこんだ異色の、ひいては本集の説話集としての特色をよく示す篇であり成季の表現において同様につよく意識された篇である故であり、事例数の偏りは編著者との関係上必然の事象と考えられる。

上接語についてはいかがであろうか。省略表現においてはいずれも助動詞が中心を為す。全事例179の中158例が然りである。助動詞の中では「けり(ける)」が大勢を占め、語別にか、けると、

けりとぞ	5	70
けりとぞ	58	70
けりとこ	37	41
けりとこ	1	2

けりとこ	0	2
けりとこ	1	2
けりとこ	1	2
けりとこ	1	2

合計 142 / 158

けり	12	158
ける	130	158

こ、で注意すべきは「けり」に比して「ける」の圧倒的優勢の事実である。この傾向は宇治拾遺物語に既にもみられたこと略

述した通りであるが、本集においては終止形「けり」より省略表現「……とぞ。」等に接続する事例が激減し、連体形「ける」が「……とぞ。」等に接続する事例が82%の高率を占めることになる。更に「ける」についてみるに、これが上に係助詞を伴わないその結びとして「ける」で終止し、更に「……とぞ。」等に下接する事例はわずかに次の二例にすぎない。

扇をもちてびむをなしたまひければ、もとのごとくめでたくなんおはしけるとぞ。(613)

それよりぞ、かの妻戸はうちつけられにけるとぞ。(472)、それに対し他の128例はすべて係助詞の結びとしての「ける」ではなく、連体形「ける」が省略表現「……とぞ。」等に直接する事例である。その内訳および事例を語別にあけると、

けるとぞ	56	58
けるとこ	36	36
けるとこ	35	35
けるとこ	1	1
計	128	130

僧正比興のことなりとて諸人にかたりてわらひけるとぞ。(640)

そのいき尾の外も又別の御本尊ありけるとかや。(265) 彼御願文ことに目出かりければ、後日に藏人宮内少輔親経、表を書て奉りけるとなむ。(22)、これも権者なりけるとこそ。(454)

これも宇治拾遺物語における一つの傾向であったものが本集においては著しい特色として顕現しているといえる。

古今著聞集の「……とぞ。」・「……となむ。」等の省略表現を中心に検討して来たが、これによってその表現の性格は宇縣垂相巧語にかゝる宇治拾遺物語の表現に、より親近性を示

して居り、宇治拾遺物語の立場からすれば同文的同話・類話を共有する今昔物語集より説話的承接関係の認められない本集により近い表現性を有していることになる。この点を表現における他の部面としての擬声・擬態語の用法から更に検討してみよう。

四

擬声(音)・擬態(容)語は一般の記号的言語とはことなり、音象徴によって場面の活写の効果が認められる。それを表現の一面としてとらえてみたいと思う。今昔物語集をはじめとする中古の擬声・擬態語については山口仲美氏の御研究もありそれも参考にさせていただく。

今昔物語集においてはその量に比して擬声・擬態語は多いとは言えず、ことなり語数50語、全事例数160例である。巻全体よりすれば、後半の巻一九以後に集中し、特に二六、二七、二八、二九(宿報、靈鬼、世俗、悪行)に集中している傾向がある。これ等の本朝世俗を中心とした巻々に多いことは擬声・擬態語の表現効果という面からは必然の結果と考えられる。又、各語を語頭第一音節の性格より類別すると、ハ行(18)、カ行(11)、タ行(8)、サ行(7)、ア・ナ行(各2)、ヤ行(1)の順。事例数の上では、「キト」36例が一番多く以下「ハラハラト」14例、「サト」10例……の順となる。

宇治拾遺物語では、ことなり語数67語、全事例数114例。巻別よりすれば、巻七に一例も見えないが、他の諸巻に特に偏在せず、巻一〜巻六(91話)に60例、巻八〜巻一五(99話)に54例と、前半においてや、優勢といえようか。話別に言えば、「信

濃国聖事」(八〜三)に6例と一番多く、「清明藏人少将封ずる事」(二〜八)、「海賊発心出家事」(一〇〜一〇)各4例とづいている。現在の宇治拾遺物語に従うかぎり右のごとく各巻に散在し特色を示さないが、小林智昭氏が各説話を内容別に分類し、総数197話を、(一)世俗説話、(二)仏教説話、(三)混淆説話と三つに大別し、更に下位分類を行ない各話をあてて居られるが、その分類に従い擬声・擬態語の所属を考えると、(一)世俗説話……41話(70例)、(二)仏教説話……14話(23例)、(三)混淆説話……11話(21例)。混淆説話中「興言利口譚」(7例)とされるものを(一)の世俗説話に入れて考えると計77例となり、全事例114例に対する割合は68%となり、擬声・擬態語が「世俗説話」の中で頻用されている事実をはつきりみることが出来る。なお語頭第一音節の性格よりいえば、ハ行(17)、サ行(13)、カ行(12)、タ行(9)、ア行(6)、ヤ行(4)、ナ・マ・ワ行(各2)となり、語別では、キト(9)、ハラハラト(7)、キラキヲト・ホロホロト(各5)の順。

以上が今昔物語集・宇治拾遺物語にみえる擬声・擬態語の実態の概要である。宇治拾遺物語はその量よりして擬声・擬態語の増加が顕著であることがわかる。

右の事実を基本として、古今著聞集の擬声・擬態語について巻・篇目毎に事例をかかげたのが第四表である。

巻	篇目	事	例	事例数
一	神	祇		0
二	祇	教	さめざめと(57)、やすやすと(64)	2
三	政道忠臣		なへなへと(77)、ほろほろと(77)	2

〔 第 四 表 〕

計	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	卷												
	魚蟲禽獸	草	飲	変	柞	興言利口	闘	宿	遊	祝	偷	博	藏	画	相撲強力	馬	弓	武	好	孝行恩愛	衛	能	管絃歌舞	和	文	公	事	篇	目	事	例	事例数	
	するすと(707)、ひししと(700)、びりびりと(699)	なへなへと(662)	ばらばらと(623)、ふたふたと(640)	ま(607)、はあ(605)、ま(603)、や(611)	さうまうと(523)、じりりと(522)、るりと(563)、ま(523)	ほろぼろと(487)	はたと(476)、ふつと(475)		ひやひやと(439)、ほとほとと(441)、よはよはと(436)		むらむらに(408)	ぬれぬれと(381)、ひしと(376)、むすと(381)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)	さ(347)
90	8	1	2	16	0	18	0	1	4	0	0	5	0	1	13	2	1	2	1	0	1	1	5	3	0	0	0	0	0	0	90		

※事例の下の()印でかこんだ数字は、日本古典文学大系本の説話番号を示す。

ことなり語数56語、全事例数90例。巻・篇目毎に事例数にや、偏りがみられる。興言利口(巻一六)18例を筆頭に、変化(巻一七)16例、相撲強力(巻一〇)13例、魚蟲禽獸(巻二〇)8例の順位となっている。巻一〇をのぞき他はいずれも本集の末尾に近い巻々に集中している。興言利口篇に一番多くみられるのは宇治拾遺物語において世俗説話(興言利口譚)に事例が集中していることと軌を一にすると言うべく本集異色の巻の表現における一特色をあらわしていることになるであろう。各話で言えば、607番(6例)、377番(4例)、265・381・382・476・520・523・602の各番(各3例)の順となる。語頭第一音節の性格より言えば、カ行(13例)、ハ行(12例)、サ行(10例)、タ行(7例)、ナ行(5例)、マ行(4例)、ヤ行(3例)、ア・ワ行(各1例)の順。語別では「キト」6例、「チ(ウ)ト・ヒシト」各5例、「ムズト・ヤスヤスト」各4例の順である。

さて本集における擬声・擬態の各語は右にみるごとく興言利口篇の同時代の説話の語り口の中で、場面をリアルに感覚的に活写する効果を大ならしめているが、これ等はその本来の用法に従い、実質的意義を有する用言(動詞)に接続するのがほとんどである。

- さめくとなきけるを、(57)
- さうくとわらひて候けり。(523)
- びりくとひろめきてやがてしぬ。(699)
- しかし次のごとき事例もある。
- (イ)昔は人の装束もなへくとして有ける。(77)
- (ロ)さうめきたる人のさやくとしてまいるをと……(476)

(イ)その夜はだらりとしてねたりけり。(551)

(ニ)みすをやをら引あげて、ゑみくとして。(523)

(ホ)なへくとして、いける物にもあらず。(605)

(ハ)としよりたるうばの、ゑみくとしたる形を……(603)

右にあげた事例はいずれも下接の語が実質用言ではなく、山田孝雄博士のいわゆる形式用言に属する形式動詞「す」についている注目される。(ハ)の事例をのぞき、他は「して」につづくが、この「して」が説明存在詞「なり」・「たり」・存在詞「あり」と結合又はその代理としての働きをなしていると考えられる。(イ)は「して」が「あり」につづき、(ロ)・(ハ)は「して」が「まいる」・「ぬ」の実質動詞につづきその状態性をあらわす役目になつてゐる。(ニ)・(ホ)は「して」で中止し、存在詞「あり」の用法を兼ねてゐることである。(ハ)は「したる」と説明存在詞に接続した事例である。本集における擬声・擬態語の用法としていづれも注意される。

今昔物語集・宇治拾遺物語・古今著聞集三作品の擬声・擬態のこととなり語数・全事例数を順位で示すと、

ことなり語数……今(67)、著(56)、今(50)^①、
全事例数……今(160)、字(114)、著(90)

今昔物語集は量より比すれば全事例数160で多いとは言えず、ことなり語数は最下位であるからその貧弱さがめだつ。宇治拾遺物語が相対的に豊かといえるが、今昔物語集との同話・類話も多く独自の語はもっと減少するはずである。次に三作品に於いての共通語彙(擬声・擬態語)を示す。

(I)「今・宇・著」三作品共通語

キト・キラキラト・サメザメト・サヤサヤト・チウト・ツフツフト・ハタト・ハラハト・ヒシヒシト・フタフタト・フツト・ホロホロト (12語)

(II)「今・宇」二作品のみ共通語

エフ(ウ)エフ(ウ)ト・キシキシト・コソコソト・サツト・ザブリト・サラサラト・ツブリト・ツラツラト・トウト・ハタハト・フタト・フツツト・ユフ(ウ)ユフ(ウ)ト (13語)

(III)「今・著」二作品のみ共通語

カラカラト・ヒシト・ノトノトト (3語)

(IV)「宇・著」二作品のみ共通語

クタクタト・サハサハト・スハスハト・スルスルト・ツクツクト・ナヘナヘト・ハ(ア)ト・ムズムズト (8語)

なお、三作品各独自の語は、今21/50(42%)、字34/67(51%)、著33/56(59%)となる。右よりすれば、(II)が一番共通語を多く有するがそれは両作品の同話・類話関係による重複が原因していると思われる。(×印をつけたものがそれ。)この6例をのぞくと残りの7例が両作品で説話上の重複関係のない事例で、これは(V)の宇・著共通語とは同じ数となつてしまふ。これをもつてすれば宇治拾遺物語・古今著聞集は実質的にほゞ同等の擬声・擬態語の使用があると考えることができる。今昔物語集に少ない理由は宇治拾遺物語との次のような対比の事例でその一端は知られる。

さめくと泣く(宇、六一9) ↓ 哭ク事无限シ。(今五)

のどをくつくとくつめくやうにならせば(宇、一〇―8)
↑↓喉ヲクツメカス様ニ鳴シテ、(今、三一―29)

右のように同話関係にある説話で宇治拾遺物語で擬声・擬態語をもって表現している所を今昔物語集ではそれを用いていない事例が16例もあるからである。

擬声・擬態語については語音構造の型の推移、意味論の問題もあるが枚数も尽きたので次を期したい。

五

古今著聞集の表現に関して、省略表現と擬声・擬態語の表現について今昔物語集・宇治拾遺物語と対比することによって検討した。省略表現については、本集においてはそれにより一層顕著であり、「……とかや。」のとき独自性も有しながら、管絃歌舞・画図・興言利口の各篇において頻用され暗示の効果もあげている。擬声・擬態語は興言利口篇を中心に用いられ、下接語にも新しい用法をはらみながら、宇治拾遺物語に準ずる活写の効果もあげている。総じて宇治拾遺物語は右に考察した二つの表現に関する限り、同話・類話を共有している今昔物語集よりも同話・類話関係の認められない古今著聞集により近い関係にあると断ずることができる。

注

- (1) 以下、「古今著聞集」をかく呼称することがある。
- (2) 永積安明「古今著聞集」(岩波、日本古典文学大系)解説31ページ。
- (3) 日本古典文学大系本に拠る。傍線は筆者。文例の末尾に附した数字は説

話番号。○印でかこんだものは追記抄入の説話を示す。以下同じ。

- (4) 春日和男「今昔」考―説話の時制と文体―(国語国文三八三号、昭和四一・七)「昔」と「今は昔」―「今昔考」補説(語文研究二四号、昭和四二・一〇)

右いずれも「存在詞の研究」(風間書房)所収。

- (5) 日本古典文学大系本に拠るが、表記の体裁は印刷の都合上一部改めてある。

- (6) 山口仲美「今昔物語集の象徴詞―表現論的考察―」(王朝・五、昭和四七・五)

山口仲美「中古象徴詞の語音構造―清濁に問題のある語例を中心に―」

(国語学93、昭和四八・六)

- (7) 小林智昭「宇治拾遺物語」(日本古典文学全集所収)解説31頁、小学館昭和四八・六

- (8) 山田孝雄「日本文法講義」(宝文館、昭和四六・七復刻版による)28頁

参照。

- (9) 今……今昔物語集、宇……宇治拾遺物語、著……古今著聞集のそれぞれ略称である。